

錬金の火、浄化の火、再生の火

——レイモン・ルーセル『我が魂』をめぐる一考察——

清原 正至

— Comment, disaient-ils,

Nous sentant des ailes

Quitter nos corps vils ?

— Mourez, disaient-elles.¹

多彩な芸術活動に着手し、詩作の真似事もしていた長兄の影響からか、青年のレイモン・ルーセルは、ヴィクトル・ユゴーのある詩篇（*Autre Guitare*）の末尾に、その冒頭の詩節²と対応する、相称的な四行詩（上記）を付加しては興じていた、とその創作手法の秘密を告白する遺著の余白において述懐しているが、その言及の仕方、時期、場所があまりに唐突なので、ここにこの詩人の代名詞となった「手法」（procédé）の予兆なり萌芽なりを推定するのは早計であるとしても、何らかの関係を想定し、穿鑿しようとするのは、やはり入り穿であろうか。レイモン・ルーセル——彼は自分自身をユゴーやダンテ、シェイクスピアに比肩すべき逸物と評価していた——の作品とその創作手法とに精通しているのであれば、ここに échec や doublure といった、この作家における特徴的な符牒を、過去を再生させるという円環の閉塞を、彼が庶幾していた「幾許かの死後の開花³」の伏線を看取するのも一興であろうが、事実として指摘されるのは、彼の処女詩篇『我が魂』（*Mon Âme*, 1897）が、『ヴィクトル・ユゴーの魂』（*L'Âme de Victor Hugo*）と改題され、三十五年後に、つまり彼が死去する一年前に再刊（『新アフリカの印象』に併載）されていることである。

この詩篇『我が魂』には、ジャネ博士の診断書に遍在する誇大妄想、または自己顕示が、それ以上に、この詩人の詩的創造の過程そのものが四行詩に加工され、既刊未刊の区別なく、後年の著作において結晶化する特権的な諸要素が随所に点綴されており、また「手法」の人工性がまだ介在していない、彼の詩編中「le plus 《inspiré》⁴」とされる詩作でもある。その意味

¹ Raymond Roussel, *Comment j'ai écrit certains de mes livres*, Gallimard, 2000, p.33.

² 問題となるユゴーの詩句は以下の通り。Comment, disaient-ils, / Avec nos nacelles / Fuir les alguazils ? / — Ramez, disaient-elles. Victor Hugo, *Œuvres complètes*, tome 6, Le club français du livre, 1968, p.77.

³ R. Roussel, *op.cit.*, p.35.

⁴ Michel Leiris, *Roussel l'ingénu*, Fata morgana, 1987, p.73.

では、ミシェル・レリスが推測するように、彼の「最重要な作品⁵」と目される詩篇であり、ルーセルの諸神話を規定するものの大部分が、すでにここに集約され、遍在し、交響しているのである。以下の小論では、この詩篇における上記の諸要素、照射するものと反照するものとの照応、楽音と噪音との共鳴、「火と水との相克⁶」とに着目し、さらにはそれを内外の関係に敷衍することで、この詩篇の位置を測定しようとするものである。

「我が魂」の構成

*Se dresser un public.*⁷

『我が魂』は三部構成であり、全五四四行の内訳は、第一部が三二〇行、第二部が一九二行、第三部が三二行と、偏向が顕著であるが、第三部は主題の再現部であるとすれば、『アフリカの印象』の構成が提示部と展開部とに大別されるように、表面的には、それぞれの末節を一瞥すると、夢と現を境界として、これもまた二分されている。

場景の継起がほぼ終始一貫している第一部と比較すると、映像の変転する第二部は、挿話が断続的に嵌入され、入れ子構造をなす後年の散文作品を彷彿とさせるが、これが「纏綿する悪夢」であることと関係するのか、昼間に進捗していた詩作の作業は、夢裡では難航する。むしろ彼の「意に反し」、詩作の装置は夜間において活性化し、ある意味では暴走し、收拾がつかず、制御が不能となった詩人は、彼自身の脳髓が描出する幻想に翻弄され、自らの魂の深淵、詩句を生産する「巨大な溶鉱炉」に墜落するまでになる。

第一部との相違、この破綻の原因を指摘するには、この詩篇の構成を概観すべきだろう。第一部、第二部を通じて、中心となる場景は、「無尽蔵の鉱山」で、そこに詩句を産出する「深淵」、火焰が燃え盛る「不凍の豎坑」があり、その周囲では職人たちが騒音の只中で、その火焰から奔出する「詩句の柔媚の黄金」を金鋏で摘出し、鍛造している。詩人は火勢を調節しつつ、この「奇妙な工場」の一切を統轄している。視線は、この溶鉱炉に燃料を供給し、鉱山と海港を往来する石炭商人を捕捉し、そこから海上と海港の場景へと移行する。水平線の彼方から世界各国の船団が入港し、馬上の詩人は上陸した群集を引率しながら帰還するが、その途中においても、「広大な帝国」の各地から来集した「我が臣民たち」が、さらにこの行列に参加し、「ルーセル信奉者たち (roussellâtres)」の一行は不断增加する。詩人は愛馬の鞍上で作業に没頭しているが、文字どおり白熱する作業に眩惑され、酩酊状態にある信奉者たちがその周囲に蟬

⁵ *ibid.*

⁶ Raymond Roussel, *Œuvres I*, Pauvert, 1994, p.41.以下、「」で注記のないものは、すべて同書に収録された *Mon Ame* からの引用である。

⁷ Paul Valéry, *Œuvres II*, Gallimard, 1970, p.632.

集し、「私を判読し」、拝跪し、祈祷を、讃美歌を斉唱しながら、その模様を注視している。やがて黄昏と睡魔が到来すると、詩人は作業を完遂させ、堅坑は鎮火し、「一切が終息し、私〔詩人〕は就眠する」。

前記のように、ここ第一部には、大凡三つのシークエンスが設定されうるだろう。そのほとんどが、『眺望』を筆頭とする、後年の作品における執拗な叙述を彷彿させるような場景の描写に終始し、実際にこの詩的装置が産出する、いわば挿入詩は、一ヶ所のみ（V. 271 - 280）である。ところが第二部になると、沈静したはずの堅坑が再発火し、そこから詩句の断片が、詩人の統御する能力を圧倒するほど次々と奔出しては散逸し、また挿入詩——狩猟、劇場、舞台背景、画舫に乗船する夫婦の場景——の関係は、論理的に解決すべき「事実の方程式⁸」を現出させる「手法」の介在がないためか、一貫性、論理性のある流暢なシークエンスを構成することなく、反対に無力となった詩人を擲擧するかのように次々と急転し、彼を翻弄する。

Malgré moi le feu se ranime
Constamment, et là, tout en haut
Je vois sortir une maxime
Dont je ne comprends pas un mot. (V. 357 - 360)

Mais je ne peux trouver la suite
Et dans la flamme plusieurs fois
La même phrase est reproduite
Et retombe au fond par son poids. (V 369 - 372)

Je me désole et je me lasse
De ne rien inventer de bon,
Et par un effort je ramasse
À terre un morceau de charbon. (V. 377 - 380)⁹

ところで、詩句を産出するのは、そしてこれらを鍛造し、鏤刻するのは、厳密には「私」であるところの詩人ではない。前者は堅坑の火焰であり、後者は彼の手足となって労働する職人たちの補佐が不可欠である。そして堅坑＝彼の脳髓に燃料を供給する石炭商人も、「我が詩篇、我が栄光、そして私」（V. 252）を讃美する「ルーセル信奉者たち」もいない。詩人の支配を成

⁸ R. Roussel, *Comment...*, *op.cit.*, p.23.

立させるこれらの不在こそが、第一部と第二部の相違点であり、詩人の統轄する創作の営為を破綻させるものであろう。『ロクス・ソルス』の天才科学者、マルシャル・カントレルにも、一連の作業を扶翼する助手が存在し、事物と事物の予期せぬ関係確立し、前代未聞の発明品を完成させるには、それなりの媒介物（ヴィタリウムやレジュレクティーンのような）が必要であったように、むしろこれらが「我が詩篇、我が栄光、そして私」を完成させるのに不可欠なものなのである。

詩人の新生

S'imiter soi-même.

Il est essentiel pour l'artiste qu'il sache s'imiter soi-même.

(...) L'artiste prend pour modèle son meilleur état.¹⁰

一九二〇年代、ルーセルはその当時着手していた詩作（『新アフリカの印象』）を中断してまで二編の戯曲を創作しているが、前者の『額の星』（*L'Etoile au Front*, 1925）の上演は、シュルレアリストたちの介在もあって、前作の『ロクス・ソルス』と同様に、彼の名前を悪名として一躍世間に浸透させた一大醜聞となったものである。それはさておき、この題名は、同戯曲の一登場人物の台詞によれば、さまざまな分野における偉大な創造主が先天的に所有する属性の一つ（とルーセルが想定しているもの）に由来している。額に何らかの証徴がある人物は、それぞれが何らかの異能の持ち主であり、そしてそれは勿論ルーセル自身も所有すると確信しているものである。「どうしろというのですか、なかなか爆発しない砲弾があり、それらが爆発するとしたら！ 仕方ないじゃないですか、運命づけられた人々がいるのです！ 詩人が言うように、額に火傷のような疼痛があると実感される……。額にある燦然たる星が。そう、私は額に星があるのだと実感し、それを失念したことは一度もありません¹¹」。

選良の象徴への言及は、彼の作品を一読しているならば、馴染みのあるものであり、事実、晩年の『新アフリカの印象』に到るまで、幾度となく登場し、反復されるのだが、それは『我が魂』においても同様である（しかし、後段において論及するように、その意味、コンテクストは同様ではない）。

Aussitôt vers moi, l'on s'appelle,

On s'interroge, on se répond,

⁹ 日本語訳は後段に併載した拙訳を参照されたい。

¹⁰ P. Valéry, *op.cit.*, p.546.

¹¹ R. Roussel, *Comment...*, *op.cit.*, p.128.

Citant des vers qu'on se rappelle,

On me fixe, surtout au front ; (V. 109 - 112)

ところで、彼は韻文の小説『代役』(*La Doublure*, 1897)の執筆中に、彼に天才を自覚させると同時に、彼を一生悩悶させる病気の原因ともなる出来事、「世界的な栄光の感覚」を実感するという「奇妙な発作」を体験しているが、何故それが栄光を約束された詩篇ではなく、作中においては失敗が継起する小説、実際に「その不成功が私 [=ルーセル] に激烈な衝撃を惹起し(中略)、その動揺が一種の皮膚病を誘発する¹²⁾」結果となった小説の制作中であって生じたのか、また、何故この処女詩篇が『代役』の刊行後に発表されなくてはならなかったのか。おそらく直接の回答はないだろうが、それゆえ別箇の観点から一考すべき余地はあろう。

前掲の引用において、「詩人が言うように」とルーセルは表明しているが、それはどの詩人なのか。彼が同一視しているユゴーなのか、またはダンテ、シェイクスピアなのか——おそらくこれらすべてであり、すべてでないだろう。『我が魂』は、《inspiré》の作品であるとしても、「何処かの文学の貯蔵庫から搬出した¹³⁾」かのような「平凡な隠喩¹⁴⁾」を産出すると同時に、これらの集積体でもあるが、これらを生成し、鍛錬し、そしてこれらによって構築される詩人の魂——畢竟するに、詩人自身——は、特殊な存在であると同時に普遍的な存在であり(天命によって選出された天才一般が、栄光の感覚を直感したのかどうか、ルーセルは確認しようとし、実際にそうしたのだが、期待した結果がえられずに落胆したという)、そして彼はこれを模倣する——ダンテやシェイクスピアに同一化するように。(彼の周囲の同時代人たちが証言するところによると、彼が物真似の達人であったというが、彼が「本当に成功の感触をえられた¹⁵⁾」のは音楽と物真似だけであった。)換言するならば、虚構の模倣による、それは、分身の、正確にはむしろ代役の創出(と同時に原像の捏造)であり(それゆえの狂気である)、さらにこれを模倣すること、再生、再現すること、つまり *représentation* による——手法による主要な散文作品が、すべて戯曲に翻案されていることも加味すべきだろうか——、魂の浄化であるのだ(それゆえの恍惚¹⁶⁾ = 脱自である)。

Regardant fuir au milieu d'elle

Les vers surgissant sans effort,

Dans la postérité fidèle

¹²⁾ *ibid.*, p.29.

¹³⁾ Alain Robbe-Grillet, *Pour un nouveau roman*, Minuit, 2002, p.71.

¹⁴⁾ M. Leiris, *op.cit.*, p.73.

¹⁵⁾ R. Roussel, *Comment...*, *op.cit.*, p.34.

Je vois plus tard grandir mon sort.

À cette explosion voisine
De mon génie universel
Je vois le monde qui s'incline
Devant ce nom ; Raymond Roussel.

Sur la terre que je domine
Je vois ce feu continu
Qui seul et sans frère illumine
Partout l'univers actuel. (V. 533 - 544)

額の星、日夜の不断の創造、爆発寸前の砲弾、内部の光源、世界を遍照する太陽、恍惚とともに殺到する群集、そして栄光・・・前述のように、爾来宿痼となる発作を経験してから、彼は当時の心理学の大家、ピエール・ジャネ博士の患者となるが、それらの定期的な受診と治療の記録を、その遺著に再録（またしても再生、再現だ）している。そこにある述懐、それはまさしく『我が魂』の詩人の肖像をなぞるものである。

傑作を創作している、または天才であるという、何か特異なものが実感されるのです。（中略）私は栄光を実感していました・・・。（中略）この栄光は一個の現象であり、確認された事実であり、一個の感動でした、私は栄光を享有していました・・・。私が執筆したものは光輝に囲繞され、（中略）発散される光線は中国まで到達し、夢中になった群集が我が家に殺到したでしょう。私は用心していましたが無駄でした、光線は私から滲出し、四壁を通過していきました、私の内部には太陽があり、私自身の見事な閃光を遮断することは不可能でした。各行は何千もの部数において反復され、発光する数千の筆先で私は創作していました。おそらく、この書物の出版時に、煌々たるこの光源はより一層露見し、世界を照射しているでしょうが、創造されたものではありません、すでに私は内部にこれを保有していたのです・・・。¹⁶

上記のように、多少は変形されているとはいえ、ルーセルの全作品に通底するこれらの諸要素は、この過程を通過することで、この自閉的な世界全体に浸透し——むしろこれらの語彙が

¹⁶ *ibid.*, pp.129-130.

この世界を創造し、絶え間なく再生産していくことになるが、それは語彙の次元だけではない。一度構造が確立されれば、確立された構造それ自体が反復され、再生されることになるだろう。彼の物語、作品、書物の構成を想起すれば、それが過去へと類推的に遡行し、「予期せぬ創造¹⁷」の起源を再発見し、再生することを目的とする、照応関係をなしているからだ¹⁸。「ああ！ 精神の太陽という感覚、私はそれを二度と見出しえませんでした。私は現在もそれを追求し、永遠に追求するでしょう。一瞬でもあの栄光を再生するためなら、私は全生涯をその代償にするつもりです¹⁹」。

『我が魂』は、「平凡な隠喩」や象徴を産出すると同時に、これらの織物であり、またそれらを駆使することでそれ自体が形成される、自己生産的、自己言及的な構築物である。別言すれば、これは詩篇を創造する過程の詩篇であると同時に、創造主による創造主の創造でもあるのだ。そしてすでにここには、詩人「レイモン・ルーセル」の血肉となる要素、語彙が規定されており、さらに、この詩人の言動、この詩人における諸現象に根拠と意味とを賦与する「個人的な神話²⁰」であると同時に、現実を認識し、対応するための「純粹状態の規則²¹」の起源となるのである。

詩人の死

L'œuvre modifie l'auteur.

(...) Il se reconstruit en quelque sorte un formateur de l'ensemble réalisé, qui est un mythe.²²

ルーセルの代表作の一つ、『アフリカの印象』(*Impressions d'Afrique*, 1910) は、同一の祖先から分裂し、長年抗争状態にあった二王家の統一を記念する聖別式から開始する。『無数の太陽』(*La Poussière des Soleils*, 1926) は、故人となった叔父の隠し遺産を探索する物語であるが、その道筋はすでに設定されている。彼の物語は、冒頭ですでに何事かが完結しており、一貫してそこから現在を照射する過去の探求と再現を目的としている。換言するなら、すでに秩序の確立した、静謐かつ凍結した世界が既在しており、それがいかにして確立されたかを解明

¹⁷ *ibid.*, p.23.

¹⁸ Cf. Michel Foucault, *Raymond Roussel*, Gallimard, 1992, pp.101-102.

「ルーセルにあって、数々の装置、上演、調教、武勲は、二つの重要な神話的機能、結合することと再発見することを遂行している。(中略)〔模倣は〕結合することと再発見することを一体化する最も経済的な形態である。模倣するものは、実際、世界や諸存在の厚味、階級化された諸種の数々を横断し、モデルの位置に到達し、自己においてこの他者の真実を再発見する。」(強調原文)

¹⁹ R. Roussel, *Comment...*, *op.cit.*, p.131.

²⁰ M. Leiris, *op.cit.*, p.79.

²¹ *ibid.*, p.69.

し、解明するその技法や手腕を照明し、隠蔽された光源、すなわち潜在する「栄光」を露見させるべくして露見させ、起結の一致する閉鎖的な円環を描出しては、そのように構成されたこの秩序の均衡を追認するのが、微小な相違はあれども、多かれ少なかれその骨子となっている。

この世界、整序され、固着された不動の舞台とは反対に、『我が魂』のそれは、あえて対比するならば、夢と現の交錯する、そして轟音と酷暑の支配する混沌の世界である。この混沌から秩序を生成する過程を媒介する詩人は、ルーセルの場合にあって、「現実に対応するため²³」、内部と外部との挟間において、数多の創世神話の英雄たちがそうであるように、両義的な存在であることを余儀なくされる。

(・・・) 成功したことを確信していないという、まさにその一点において、人間は称賛と名誉に執着する。虚栄心の根底には謙虚があるのだ。称賛を追及するのは安堵するためであり、世人の熱烈な称賛で囲繞したがるのは、自己の作品のおそらく不十分な生命力を持続させるためである。早産の新生児を綿布でくるむように。将来性、永続性のある作品を創出したと断固として確信している人物は、もはや称賛を歯牙にもかけないのであり、自己を栄光以上のものだと実感するのだ。彼はそれを保持していると自覚しているからであり、彼が実感する歓喜は至高の歓喜だからである。²⁴

ルーセルの遺著『いかにして私はある種の本を書いたか』や、これに収載されたジャネ博士の著作の引用を通読すれば、ルーセル＝マルシャルの発言において、矛盾する箇所が散見されるであろう。一方で、世人の賛否など歯牙にもかけず、超俗的な栄光の先天的な内在を確信している詩人がおり、他方で、「満場一致²⁵」の称賛を、世俗的な栄誉、成功を希求する詩人がいる。この自家撞着から、彼岸と此岸との両棲的な存在（模倣がこれを準備したのだ）を考察するにあたり、上述の『我が魂』の構成、すなわち夢と現との相違を想起してみよう。第一部と第二部の相違、それは詩句を鍛造する職人たちと、領土の各地から参集し、詩人の神技を讃美する「ルーセル信奉者たち」であり、これらが彼の詩篇を創作する、と先述したが、これを別箇の観点から、詩人の身体を機軸として着目してみる。

第二部では、これらの不在によって、詩人は真夜中の火焰を統御できず、むしろ作業それ自体が成立せずに頓挫し、堅坑＝脳内に生起する現象は混濁し、絶え間なく場景が変転するように、多方向へと拡散するのであるが、より厳密に言えば、夜中（夢裡）にあって、詩人の頭部

²² P. Valéry, *op.cit.*, p.673.

²³ M. Leiris., *op.cit.*, p.69.

²⁴ R. Roussel, *Comment...*, *op.cit.*, p.131. 原文は Bergson の講演 *Life and Conscience* よりの引用。

²⁵ *ibid.*, p.35.

が、いわばその主体の支配から独立するのである。むしろ彼の頭部、つまり身体は、元来詩人の支配から自律しているのであり、それゆえ、自身の頭部を観察する詩人といった、以下のような主客の錯綜が露呈される。

Dans ma tête, en miniature
On s' imagine, au sein du noir,
Un même gouffre où l'écriture
Germe aussi du matin au soir. (V. 181 - 184)

Et dans ma tête aux cieux noirâtres
Maintenant je vois encor mieux
Le foyer aux flammes rougeâtres
Vomir ses vers prodigieux. (V. 229 - 232)

Sur la profondeur de l'abîme
Mon corps se penche de nouveau,
Léché par la flamme sublime
Qui s'élève de mon cerveau. (V. 353 - 356)

『我が魂』は、もう一人の詩人を登場させることで、創造の営為、過程そのものを対象化し、一種の即物的な内観の劇場という様相を呈している。詩句を産出する豎坑の火焰は、彼自身の脳髄でもあるわけだが、ここでは内外の境界が無効化され、詩人の内面を外面化している様子が看取されよう。既述したように、これは詩人の身体を媒介とする世界の創造の神話であり、さらに既存の秩序を混沌として把握し（ルーセルは現実のあらゆる変化を忌避していた——後年、ルーセルはジャネ博士に、「作品は現実のものを一切内包してはならない²⁶」と述懐する）、これを再創造する営為、過程であると同時に、詩作の主体（詩人の主体ではなく）そのものを再構築する行為、過程でもある。これら職人たちとルーセル信奉者たちは、創造する行為の一部として統合されているのだ。（それゆえに、roussel と lâtres とは不可分なのであり、その結合は必然なのである。）詩人は世俗的な称賛を希求していたのではなく、すでにこれは「我が詩篇、我が栄光、そして私」を構成する一部なのである。

²⁶ *ibid.*, p.132.

Pourtant pendant que je travaille,
Parfois je lève un peu les yeux
Sur la foule, quand ma trouvaille
M'éblouit encor de ses feux. (V. 289 - 292)

Et grâce à leur ardeur nouvelle
Je puis laisser tout son essor
À la flamme qui devient telle
Que mon orgueil s'accroît encor. (V. 529 - 532)

そしてルーセルは、詩人を火葬することで、夜を、夢を追放する。それと同様に、「両翼を実感する」(sentant des ailes) 彼は、夜の、夢の身体、「卑俗な身体」(corps vils) を排除するのである(追求すべきは「精神の太陽」であることを想起すべきであろう)。「哄笑する素人」が存在する夜と夢を介在させると、自律的な秩序は攪乱され、瓦解する。これらは「世界を遍照する」栄光を隠蔽し、「額の星」を被覆してしまうのである。火と水とが相克するように。——それ以上に、栄光の光源への遡及を阻害し、この秩序の恣意性を暴露する——栄光の絶対性を毀損する。夜を太陽で掩蔽することは、すなわち秩序の恣意性を掩蔽することであり、詩人の身体における両義性の蠢動を制御することである。そしてこの詩篇に即していえば、夢の閼入は世界の解体と同時に新生を招来する。陽光と栄光とに囲繞された悪夢、第一部と第三部との間に挿入された第二部は、詩人の墜落によって閉幕するが、彼が深淵に墜落し、そこから復活する(覚醒する)という挿入詩は、まさしく入れ子構造(mise en abîme)をなすことが約束されているのである。

Enfin en tombant, je m'éveille
Le front tout couvert de sueur
Et dans ma chambre où tout sommeille
Le jour met déjà sa lueur. (V. 509 - 512)

詩人の再生

Il faut regarder les livres par-dessus l'épaule de l'auteur.²⁷

²⁷ P. Valéry, *op.cit.*, p.626.

太陽に守護された真昼の詩人は、秩序を樹立し、これを反復し、追認する創造主として再生する。しかし周知のように、この太陽を埋蔵する²⁸深淵＝渦巻の découvrir には、なお数年間の探鉱の時期が必要であった。爾来、彼の作品には「無数の太陽」が点綴され、埋設されることになるが、その太陽とは、無論、「輕妙、尊大な機械であり、それらすべての中心にある、至高の手法²⁸」である。

それは巨大な塵埃の雲塊で、無数の粒子で構成され、その一粒一粒が、諸々の宇宙の渦巻く太陽系の中心だ。これら数百万の太陽の多くは、我々のそれよりずっと巨大で、激烈で、灼熱していて、耀映していて、強力なんだ！……。そしてこれら数百万の太陽のそれぞれが何らかの中心なんだ！……。²⁹

『無数の太陽』の恋人たちを結合する太陽、火と水とを和解させ、「事実の方程式」を現出させる手法がこの世界に導入されることで、座標軸が設定され、四方へと拡散する想像力（ルーセルは「私にとっては想像力がすべてである³⁰」と表明しているが、それはこの座標軸があつてこそのものであろう）には方向性が賦与され、それを論理的に解決すること、そして類推による起源への遡行と再現とが可能となる、自閉的な神話的空間が成立し、ルーセルはそれをまねび、再生しつづけることになる。

しかしこれらの太陽が、宇宙の深淵にあつては相対的な中心であり、またこれらが恋人たちに眺望されるのは、晴夜においてであるように、そしてまた、後年、何重もの括弧によって圍繞される『新アフリカの印象』の詩節のように、もう一つの遮蔽物、もう一つの括弧が追加されていることを失念すべきではあるまい。『ヴィクトル・ユゴーの魂』と改題され、前掲の書物に併載され、死の直前に再刊（再生）された、詩人を創造し、火葬し、再生する詩篇『我が魂』には、若干の詩句の変更（roussel は lâtres から分断され、「この名前、レイモン・ルーセル」が抹消されている）がなされ、以下の「三行の序文³¹」が冒頭に配置されている。「最後の結末＝転落」を創作してから就眠する彼は、ここで悪夢からの覚醒を、「死後の開花」の布石を準備していたのではないだろうか。

一夜、私は夢路で、文机で詩作するヴィクトル・ユゴーと邂逅した。以下は私が彼の肩越しに前傾して披読したものである。³²

²⁸ M. Foucault, *op.cit.*, p.95.

²⁹ Raymond Roussel, *La Poussière de Soleils*, Pauvert, p.200.

³⁰ R. Roussel, *Comment...*, *op.cit.*, p.27.

³¹ François Caradec, *Raymond Roussel*, Fayard, 1997, p.56.

³² R. Roussel, *Œuvres I*, *op.cit.*, pp.37-38. (強調引用者)